

## 「検査画像から読み解く次の一手」

### 座長集約

東北大学病院 中田 充

青森県立中央病院 伊丸岡 俊治

本セッションでは、「検査画像から読み解く次の一手」をテーマに、緊急血管内治療(IVR)が必要となる代表的疾患である脳梗塞、大動脈瘤、外傷、腹部血管閉塞の四つの病態を対象に、診断画像から治療方針を導くための実践的アプローチが示された。各演者からは、CT や MRI、3D 画像など多様なモダリティを駆使した診断法と、現場での迅速な意思決定に資する読影の要点が提示された。

岩手県立中央病院の千葉虹希先生による「脳梗塞 IVR」では、主幹動脈閉塞およびペナンプラ評価における CTA・CTP・DWI・FLAIR の有用性が示され、再開通療法適応の判断における画像解析の重要性が強調された。新潟大学医歯学総合病院の新田見耕太先生による「大動脈瘤 IVR」では、CTA における切迫破裂や造影剤漏出の描出例を通して、ステントグラフト内挿術の適応判断に直結する画像読影のポイントが整理された。太田西ノ内病院の瀧田幸子先生による「外傷 IVR」では、多発外傷症例を題材に、3D 画

像による損傷血管の同定と治療戦略の立案が紹介され、救急現場での画像支援の有用性が示された。青森県立中央病院の葛西健之先生による「腹部血管閉塞症」では、CTA による閉塞血管および腸管虚血の評価から、血栓溶解術や血栓除去術の適応判断における画像所見の意義が解説された。

総合討論では、画像診断が「次の一手」を決定づける上で、正確かつ的確な情報収集と共有の重要性が改めて強調された。特に、救急現場においては、撮像条件・再構成画像・報告内容などの情報を迅速に整理し、関係診療科間で共有する体制が治療成績に直結することが再認識された。本セッションを通じ、緊急 IVR における画像情報の価値が再評価され、画像診断を中心とした情報連携体制の整備が今後の医療の質向上に不可欠であることが明確となった。迅速で正確な画像情報が、次の一手を導く確かな指針となることを参加者全員で確認し、今後の臨床実践と研究の方向性を共有する有意義な機会となった。